

2012年度国際文化学科海外実習（ヨーロッパ）報告

担当教員 岩川 亮・大島 衣

本年度、国際文化学科海外実習はオーストリアの首都ウィーンを中心として、ドイツ（ミュンヘン）およびフランス（パリ）を加えた三か国で行なわれた。参加学生は26名、引率教員は2名であった。学生はドイツでの研修を希望するものが多かったが、同じドイツ語圏でも多少雰囲気の異なるオーストリアを選んだのは、東欧に近い地理的環境に学生を導いて、東西に広いヨーロッパ世界をさまざまな側面から見てもらいたい、と考えたからである。その意味では、途中の週末にミュンヘンを訪ね、旅の最後はパリに1週間以上滞在して、それぞれ自由に動き回れたことも、ヨーロッパを見る際の視野を拓ける役割を果たした筈である。

学生の興味は多様であり、それぞれに個性的ではあるが、現代日本文化の中にどっぷりと浸かって過ごした二十年余の年月は、学生たちを日本的鑄型に固めるに十分な長さであろう。その間に起こった世界的規模の世界史的な事件など、この平和な日本の片隅に暮らす乙女たちの目には殆ど影を落とさなかったに違いない。彼女たちの人生は、ベルリンの壁崩壊からソヴィエト連邦の崩壊、東欧革命、ユーゴ内戦、といったヨーロッパ大変革の時代に重なるのである。それを、単に「失われた20年」という日本的文脈の中で捉えるのでは「国際文化学科」の名がすたる。

さて、今回の旅は8月25日から9月18日までの25日間という長丁場。まずは成田発、パリ経由、ウィーン着の長時間移動が最初の難関であった。仙台駅を昼過ぎに新幹線が発車し、夜10時頃に機中の人となり、延々12時間の窮屈な蟄居・睡眠。それに加えてパリ・ドゴール空港での長時間待機、そしてウィーンまでの飛行機とその後のバス移動。これには、さすがに参った。

郊外の宿舎に到着後、旅装をとく間もなく、早速、市電での通学訓練に出掛ける。翌日から始まる語学実習への準備であるが、切符の買い方、乗り換え停留所の確認、市内交通や日々の買い物のための案内もある。夕食も自分でとらなければならない。

そんな中、市庁舎前で開催中の野外映画祭の屋台に繰り出し、各自勝手に食事。その後は皆教えられた通りに無事に宿舎に帰り着いた次第である。

このようにして翌日からスタートしたウィーン語学実習は、何事につけ自主的判断に委ねられるという厳しい訓練の場となった。

ウィーン市中心部、ジルヴェスターコンサートで有名な楽友協会ホール裏手のアルファ語学院は、かつて現国連事務総長のハンジムン（潘基文）がドイツ語を学んだところであり、

権威のある学校であるが、規模は小さい。本学学生は2クラスに分かれて会話の訓練を行なった。授業は大抵午前中で終り、周辺ファストフード店や近所の工科大学食堂で昼食を済ませた後、午後はグループ研修で、美術史美術館、ベルヴェデーレ宮殿、ホフブルク（王宮）、シェーンブルン宮殿など、美術館・博物館、歴史的建造物を見学した。

ウィーンの魅力は、音楽の伝統と建築にある。こうした方面については、ウィーンの歴史として当初にドイツ語による講義があったが、出発前に実施したドイツ語教科書によるオーストリアの歴史と文化についての集中講義は役に立っただろうか。いささか心許ないが、現地学習の刺激がきっかけとなって帰国後にさらに興味が掻き立てられ、その後の学習や研究の糧になることを期待するばかりである。実際、学生たちは、豊富に与えられた自由な時間を利用して、ユーゲントシュティルの建築やフンデルトヴァッサーハウスを訪ね、あるいは、夜のコンサートに出掛けるなど、教科書でしか見たことのないウィーンの文化に直に接し、それらを楽しんだようである。

ウィーンには2週間滞在したが、中間の週末3日をかけて電車でミュンヘンを訪問した。生憎の天気で、小雨に濡れながら、レジデンツやニンフェンブルク城を巡り、それぞれの関心に沿って、郊外のダッハウ強制収容所を見学するものあり、またドイツ博物館で科学史の学習をするものあり、と、短い時間ではあったが憧れのドイツ文化に触れることができた。天気さえ良ければ車窓から南ドイツの風景を楽しむこともできた筈なのだが。



パリは散々であった。メトロのエスカレータが工事で使えなかったり、集団拘摸に取り囲まれて身動きが取れなくなったり、パスポートをかすめ取られたり、酷いことが重なったが、

そうした困難にもめげずに楽しく旅を過ごすことが、ひとつの旅の技術である。ある意味「事故」は起こるものなのである。

パリでは、先ず4日間のミュージアムパスを購入し、いつでも自由にルーヴルやオルセーなど殆ど全ての美術館・博物館に出入りできるような態勢を整え、行動の自由を与えた。勿論、危険な場所については警告していたが、自由と危険は背中合わせである。

学生たちは勇気があり、慎重でもある。

早朝にパリを発ってモンサンミッシェルまで日帰りを出掛けたものが2グループあったし、ユーロディズニーランドを「見学調査」した者もいた。結構である。事前に『ディズニーランドという聖地』について学習していた学生もいた筈だ。すべてを学問に繋げる姿勢はこれからも役に立つだろうし、白雪姫やミッキーマウスに見とれていたとしても、研究の種を密かに脳中にしまいこんだ、しなやかな心のナデシコも私は知っている。そのように導けば良い。

瞬く間に過ぎたパリの十日間。一日二十六話でまとめればボッカチオも驚くでっかいデカメロンができあがるだろう。そんな成果を期待したいものである。

かくして、8月25日の出発から9月18日の帰国まで二十五日間に及ぶ長期のヨーロッパ実習は無事終了した。(文責：岩川)